

近年、日本の中世仏教に関する研究の進展はまことにめざましいものがある。私が研究者としての道を歩みはじめたつい十年前前は、中世仏教の研究といえば、宗派的な立場から鎌倉仏教の祖師たちの思想について論じるものが、その大部分を占めていた。しかし、その後の十年間で研究界の様相はほとんど一変したといってよい。中でも注目すべき現象は、研究視覚の多様化である。特に歴史学の分野の研究者が、積極的に中世仏教研究に取り組み始めている。そしてそれに伴って、従来あまり用いられることのなかった荘園文書や絵画・文学などが、新たな史料として注目をあびるようになった。

なぜ歴史学者がこれ程までに仏教に注目するようになったのか。それは、中世社会において仏教が、私たちの想像以上に社会のあらゆる分野に深い影をおとしているという事実によるものである。そのため、仏教を軸として中世をみていくこ

佐藤弘夫

歴史学と仏教

とによって、当時の社会の全体像をより総合的かつ鮮明に把握できるのではないかという見通しが立てられることになったのである。

かくいう私も、そうした見通しに基づいて、歴史的な視点から中世仏教の研究を進めているものの一人である。私の場合、研究を始めた当初から従来の教学史的研究に対しては、一つの不満をもっていた。本来、仏教は人間を離れては存在の意味がないものであるはずなのに、体系化された教理だけが一人歩きしているようにみえる——私にはそのように感じられたのである。

そうしたこともあって、私の研究は思想そのものよりは、実社会における宗教と民衆との交渉に焦点が向けられることになった。昨年刊行された『日本中世の国家と仏教』という拙著は、そうした視点から中世仏教を捉え直そうとしたささやかな試みである。これからも人間のおいのする仏教研究を目指して、少しずつ歩みを進めていきたいものと考えている。

(さとうひろお・盛岡大学講師―歴史学―)